

《授業と子ども》

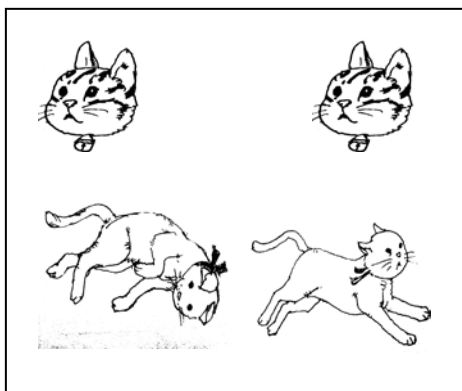
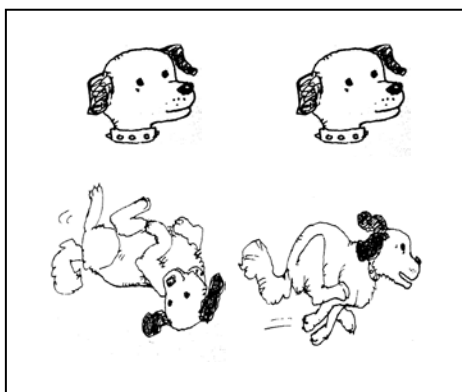
ひらがなの授業（2）

— ぶん・たんご —

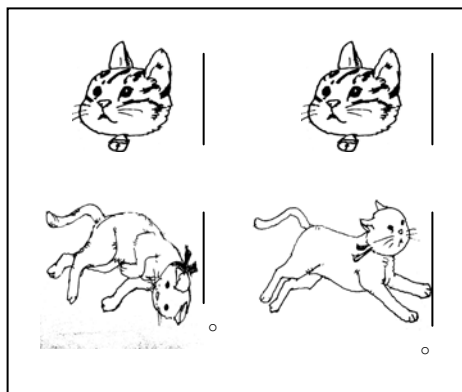
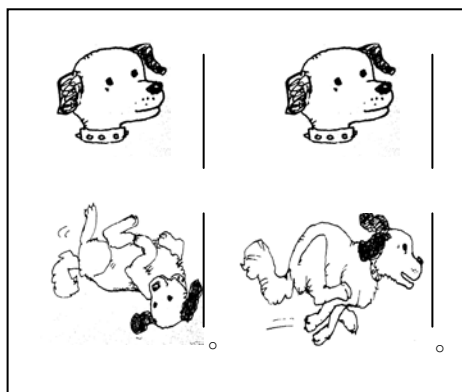
だんごじゃないよ たんごだよ

千葉 建夫

前回の授業で、何かの動作をしている人の絵を見ると、子どもたちは、「だれが」「なにを」「している。」という文が作れるようになった。これがわかれば、お話の文を分解した一つ一つのものが、「単語」であるということも教えられるような気がする。私は「たんごの授業」を次のように展開してみた。最初、絵カード（①・②）を示して聞いた。



- ① 「何が どうしているのかな？」  
「いぬが はしっている」「いぬが ねころんでいる」
  - ② 「何が どうしているのかな？」  
「ねこが はしっている」「ねこが ねころんでいる（じやれている）」
- 絵を指差して、単語と単語の間を意識させて、子どもたちの声をゆっくりと復唱した。それから、「文のしるしに線を書いてみるね。」といって、絵カードのわきに二つの線を書いた。



すると、アキラ君が「せんせい きょうのぶんは せんが きれっているよ。どうして？」と聞いてきた。 目のいい子だ。前時の学習がわかっていると、違っているのが気になってくるのだ。  
「いいことに気がついたね。ほんとうは、わけがあるんだ。」

どうしてだと思おう？」と子どもたちもたちに聞いてみた。

「あのね。さつき、せんせいはい 『いぬが』 っていうところを ちよっと ゆっくり いったでしよう。そこで

おやすみしているから」

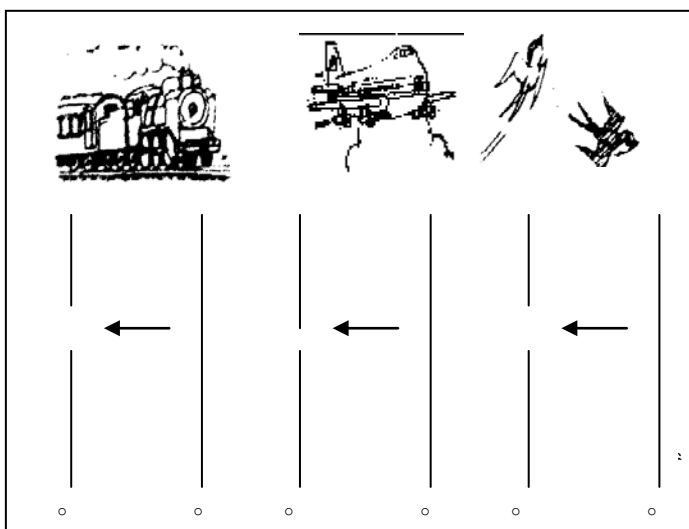
『『いぬが』 って、いきをすって、つぎに、『はしっている』 っておはなしすると はやくいうより よくわかるから」

『『いぬが』 と 『はしっている』 と二つの絵があるから、だから、二つにわけたの」

「みんな。すごいね。いいことに気がついたね。あのね。

これまで一つのお話を 文とிட்டたよね。その 一つの文を一つの線で 書いていました。その 一つの文は、『何が』 『どうしている』 とい う二つの絵になるでし ょう。二つの絵は二つ のことばですね。それ で、二つの線で書いた んだよ」

そう説明をした。そ して、「次の文も一つの 文ですね(図③)。いく つにわけられるか。や ってみてね。」と練習を



した。子どもたちは、

「つばめが (切る) とんでいる。マル」

「ひこうきが (切る) とんでいる。マル。」

「きしゃが (切る) はしっている。マル」

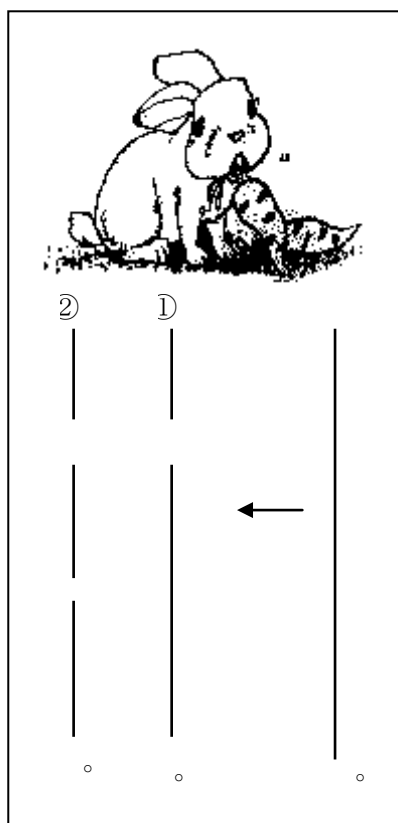
といいながら、これらの文を切って二つにわけられること を確かめていった。

「では次の勉強にいくよ」

次のうさぎの絵カード(図④)を出してたずねた。

「だれが なにを していますか？」

「うさぎが にんじんを たべています」



「じゃ この文はいくつにわけられますか？」

簡単に三つと答えられると思ったら、「①うさぎが にんじ んをたべている」と二つにわけると子どもと「②うさぎが に んじんを たべている」と三つにわけると子どもが出てきた。 一年生の子どものたの学習はそう簡単にはすすまないよう

だ。二つにわけた子は、最初の学習で一文を二つにわけたことをそのまま当てはめているのだろう。こんなときは子どもたちがものを考えるいいチャンスなのだ。

最初に「うさぎが」で一つに分けることはどちらも同じ考えであることを確かめた。それから、「にんじんをたべている」でわけるか。それとも『にんじん』を『たべている』でわけるか話し合った。後者の意見の子どもたちは、前回の「まり子さんのカレーライスの話」や「けんじくんのサッカーの話」で教わったことを思い出したようだ。

「はじめは、『だれ』ということでしょう。」「次は、『食べるもの』」「その次は、『していること』でしょう」「ここもおんなじだよ。『だれは』は、うさぎ、『たべるものは』にんじんで、『していること』は、たべている。だから、三つにわけるとだよ」と懸命に話している。

ひとつのことを学んで、それを一般化して考えるということは大変難しいことなのだと思う。けれど、小さい子どもたちでもこのように考えられるのだという発見は大きか



図⑤

った。そしてそのような考える力をどのようにつけていくかが、ふだんの授業でいつも問われているのではないかと思っただ。

ここは最終的に文に三枚の絵カード(図⑤)をあてはめたら、三つにわけられることがわかって、両方とも納得できたようだ。

次に「たんご」の指導に入った。

「うさぎさんの話は(図⑤)三つのことばにわかれましたね。きょうはあたらしいことをひとつおぼえてね。この三つにわかれたことばを『たんご』(単語)というんだよ。『ウサギが』も『にんじんを』も『たべている』も、ひとつひとつが違ったことをいうことばだけれど、これをみんな『たんご』といいます」

この説明だけで「たんご」の意味を理解できるとは思わないが、文がいくつかに分けられることがわかって、そのわけたものに名前をつけることをとおして、初歩的な単語意識を感じさせられるのではないかと思っただ。

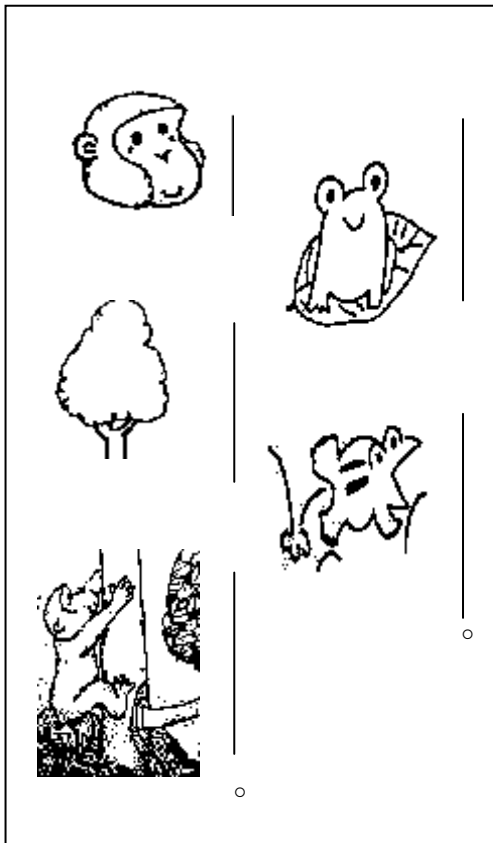
私が説明を終えるやいなや、タカシ君が「せんせい、それ、ダンゴじゃないの」と聞いてきた。するとコウヘイ君が「ぼく、ごまダンゴ大好きなんだ」と大声で叫んだ。教室にどっと笑いが起きた。出てきたなと思っただ。初めて、この場面の授業をしたときは、ここで立ち往生してしまい、「たんご」の授業が「団子」の話で終わってしまったからだ。今度出てきたら切り返そうと考えていたので、余裕を



しよう。この三つが くしでひとつになっているでしょ！  
 これが一つの文ね。そしてね。おだんごは、たんごになる  
 の」といつてきたのだ。なんて本質をつかんだみごとな説  
 明なんだろう。実は私も同じような説明をしようと思っ

もって、「そうかい。先生は、ズン  
 ダのダンゴが好きなんだよ」とい  
 って、黒板に大きく三つの団子を  
 書いた。子どもたちは「おいしそ  
 う！」といつて、机をたたいて喜  
 んだ。そのとき、ケンジ君がつか  
 つかと黒板によってきて、「あのね  
 くしには三つのおだんごがあるで

図⑥



いたので、うーんとうなつてしまった。

ケンジ君のおかげで、「ぶん」と「たんご」の関係をお  
 もしろく学ぶことができた。それからというものの、授業で  
 「たんご」の話が出ると、決まって、「だんごじゃないよ。  
 たんごだよ。」というかけ声が子どもたちから生まれた。

一つの文が、二つの単語にわけられたり、三つの単語に  
 わけられたりして、いろいろな場合があることを子どもた  
 ちがわかるようにさせたい。そのためにも図⑥のような二  
 単語文や三単語(できれば四単語文も)の入ったいくつかの  
 問題を用意し、絵カードをならべたり、単語を線で表した  
 りしながらいいねいに確かめていくことがいいと思う。

くつつきがないと がいじんさんみたい

単語の学習したあとは、一つの文の単語カードをたくさ  
 ん準備しておいて、それらをばらばらに並べて、「これで文  
 ができるかな」と問いかけ、文作りゲームをしてきた。



文のばらしたカードを



ならびかえる。

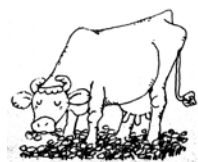
うしが



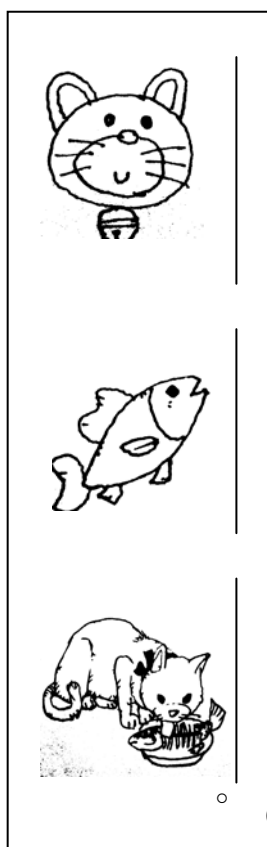
くさを



たべている。



文作りゲームをしていて、次の絵カード(図⑦)を並べていたら、



ねこ・さかな・たべる。

と助詞をぬいて読む子どもが出てきた。それをおもしろがる子もいて、「うし・くさ・たべる」という言い方がすぐに広まった。しばらく遊んだ後で、子どもたちに問いかけた。「タロウ君とカナコさんのお話の文、よく聞いてね。同じかな？」

「ねこ・さかな・たべている。」(タロウ)

「ねこが さかなを たべている。」(カナコ)

「ちよっとちがうな。タロウちゃんは、外人さんみたい」「タロウ君のは、どうして外人さんみたいに聞こえるのだと思う？」

「タロウくんのはね。ネコがの、が、ないの。サカナをの、をが、ないの。だから、そう きこえるの？」

「あのね。「を」と「が」を交換したら、こわいお話になるよ。だってね。『さかなが ねこを たべている。』ってなるんだもの」

「えー、こわい！ それ、おぼけさかなだ」

子どもたちが助詞を意識し始めていると思ったので、私は、もう一度 次の二つの文をゆっくり読んだ。

「ねこ・さかな・たべている。」

「うし・くさ・たべている。」

「おかしいよ。なんかへんだ。やっぱり ガイジンサンことばだ」

「あかちゃんことばだよ」

と子どもたちがいう。そこで、

「やっぱり、がや、をを、はっきりさせたほうがいいんだね。じつはね。猫のお話の(図⑦)たんの横の線には、がやをが、かくれているんだよ。どのへんにかくれてい

ると思う？」と聞いた。

「おしまいのほうだ。このへん このへん」

「このままでは、がやは見ええないから、見えるようにしてあげるといいよ」

「そうだね。そうだ、そうだ」

「どうすればいいの？」

「しるしをつける」

「どんなしるし？」

「●がいい。」

「もあるよ。」

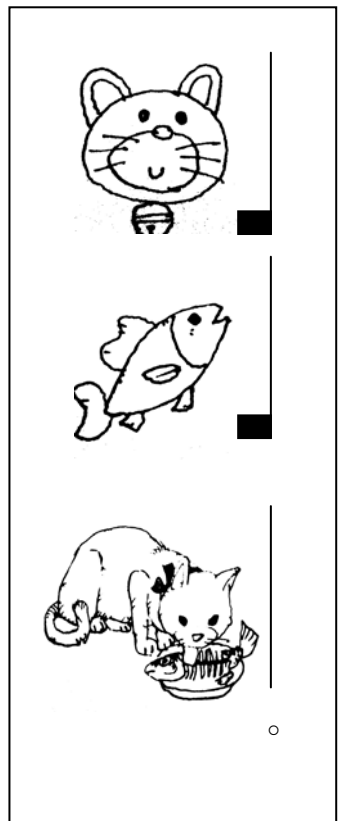
そのほかにも、▲や□、■などがいろいろ出されたので、「たくさん、考えが出たね。文の終わりに『』があるから、このマルと間違えないように、■をもらって

というのはどうかな。」

と聞いてみた。子どもたちは、

「あつ、歯ブラシマークだ。おもしろい！それがいい。」とすぐ賛成してくれた。それから、図⑧のように書き込み、

『が』や『を』があると、文のおはなしがよくわかるでしょう。ここが、がやをなどのつくばしよです。がやをなどは、単語にくっついていてから『くっつき』とよぶこ



図⑧

とにします。単語を一つ一つにしたときには『くっつき』はつきませんが、文を作るときにはこの『くっつき』がとっても大事な役目をしてくれるのですよ」とまとめた。

このシエーマ図は、あとで助詞の「は」「や」「を」などの文字の学習をするときにぜひぶん役に立った。

この授業の時、子どもたちから「おしまいの単語は、くっつきがつかないの」と聞かれて、一瞬、説明に困った。

「ここは、おしまいのたんごが『たべる』になったり『たべた』になったり、『たべています』になったりするんだよ。

ひとりで変身するから、くっつきがなくてもいいんだね。」と言ったけれど、きよとんとしていた。子どもたちは、

「ぶんのおしまいだから、くっつきのかわりに マルがあるんじゃない」「『たべるが』『たべるを』なんていわないもの。つけたらおかしいよ」

といいながら、自分なりに、納得していたようだ。単語の学習では名詞はいいけれど、動詞の活用があつかいは難しい。あとあとの課題となった。